特集

地域らしい まち並みを つくるII

町並みの整備と観光

東京大学教授
西村幸夫（にしむらゆきお）

町並み景観と観光の関係

町並みの問題を観光との関連で考える際に、どのようなことに留意したらいいのだろうか。

ひとくちに町並みと言っても、歴史的な町並みのようにそれ自体が観光の目的となっているものと、主要な対象はより広く都市そのものであったり、他に主たる観光対象があり、その周辺環境整備の目的で町並み整備が取り上げられている場合では考え方が異なる。

町並み自体が観光対象となっている場合

（これをここでは便宜的に「町並み観光」と呼ぶことにする）は、そしてこれが本特集の主要な関心事であろうが、他の観光地の場合とおかれている状況が大きく異なることに留意しなければならない。自然の景勝地はもちろん、神社仏閣にしろ、史跡名勝にしろ、通常変化しないものが観光対象となっている場合と違って、町並みには人が住んでおり、生活がある。むしろ、そこに人が住んでいることが来訪者の関心の中心だろう。したがって、これを凍結的に保存することは不可能である。仮にできたとしても、博物館のような生気のない町並みになってしまい、魅力の大半が失われてしまうことは想像に難くない。

歴史的な景観をとどめておいてほしいけれど、かと言って死んだ博物館のようになってほしくはない――町並み観光の問題は、こうした根本的な矛盾を内在させていることをまず確認しなければならない。この点に関する筆者の考え方は後に述べることにして、ここではまず、全体の枠組みを概観することにする。

町並みそれ自体が観光の主対象となっていない場合には、上述したようなせっぱつまった困難はないが、どのような町並みとして整備していったらいいのか、といった別の問題が浮上してくることになる。

城下町にふさわしい町並みや門前町らしい建物、高原リゾートの雰囲気をもり立てる風景など、その土地の特色をおもてに出した、いわゆる「らしさ」に対する思いは各人によって異なり、その内実を確定させることは困難である。しかし、「らしさ」が求められるのである。したがって、結果的にそれぞれ少しずつ異なったイメージのもとに建物が建てられることになり、地域の個性をあいまいなものにしているという例は少なくない。

問題は以下の2点にまとめられる。第一に、町並み観光と生活とをどのように両立させていくことができるかという点である。第二に、地域の個性をどのようなかたちで町並み整備につなげていけるかという点である。

歴史的町並みと生活環境

第一の問題点に関しては、以下のような考え方ができると思う。

まず、町並み観光の中身を掘り下げる必要がある。町並み観光が、単に伝統的な町並みを歩きながら鑑賞することであるとするならば、一地区30分もあれば十分ということになってしまう。いかに時間をかけて町並み整備のために地域住民の合意を形成し、努力してきたとしても、来訪客にとってみれば、芝居のセットと変わらないことになってしまう。

これでは努力が報われない。町並み観光は、書き割り的な街路景観を鑑賞するだけではなく、かつて広域の結節点として栄えてきたその都市の歴史をしのび、それが具体的に起伏のある地形を活かしてどのような形で町並みとして演出されているかを身をもって体験し、そこでどのような豊かな生活が実現されているかを知り、その豊かさを実感することへつながっていくべきものである。

究極的には、現時点で実現されているその地域の生活が地元の歴史や文化、さらには周辺の豊饒な自然環境をうまく活かした豊かなものであることが町並み観光の前提でなければならない。

来訪客はこうした豊かなライフスタイルをうらやましがってやって来ると考えるべきである。現状がそうでないとするならば、そうした来訪客が訪れるようにこちらから客を選ぶべきなのである。客を選ぶとは、なにも物理的に選別するのではなく、地域の豊かなライフスタイルに関心を持ってくれる層に向かってそうした生活情報を発信するような形でのプロモーション活動がなされるべきであるということである。

したがって、歴史的な町並みと生活との関連は、相反するものとしてとらえるのではなく、相補の関係にあるととらえるべきである。両者が補い合えるように現代生活のあり方をもう一度考え直すということである。

本特集で紹介されている飛騨古川の事例は、まさにこの確信を実証していると言える。飛騨古川が目指しているのは豊かな生活が実現されている都市であり、日々町並みが向上していくようなまちである。生活環境が向上していくことと町並みが向上していくことが同一平面で語れるまちがわが国に存在していることが、われわれに将来の希望を与えてくれる。

これまでの議論では、えてして現代人の欲求はすべて是として、これをいかに周辺状況とマッチさせるかという問題の立て方をしてきた。地球環境問題やエコロジー、環境保全が叫ばれる今日では、欲求そのものを町並み地区で提起されているようなライフスタイルのもとで見直してみること自体が意味を持つようになってくると言えるだろう。

ここまで言うと、町並み観光とは、自らの生活環境を誇るまちづくり運動なのであって、その結果としてその町並みが多くの部外者を引きつけることになる、と考えた方が良さそうである。観光は町並みにとって目的なのではなく、結果なのである。重要なのは自分たちのライフスタイルを確立し、それに自信を持つことである。そこから産業が興ってくるのだ。

「らしさ」の確立

もうひとつの問題は、いかに地域の個性を確立していくかということである。

それぞれの地域にはそれぞれの地域なりの個性がすでに存在している。少なくとも私はこれまで国内各地で個性の感じられないまちというものにお目にかかったことがない。もちろん、地域の個性は多様であるので、それを実感するのにマニュアルがあるわけではない。しかし、明らかにそれぞれの地域には他にはない特色というものがある。

もちろん私の感じ方が万人に通用する普遍的なものであるとは限らないし、何を特色と感じるかもまた、各人各様であるかもしれない。しかし、少なくとも外部からの客観的な眼には何らかの個性が感じられるものなのである。

問題は地元の人々がそれに気づいていないか、気づいていたとしても狭く近視眼的な理解にとどまっている場合が多いという点である。こうした限界を突き抜けた人も地域には存在しているだろうが、その着眼点は必ずしも地域の共通理解に至っているとは言い難いだろう。

つまりここで重要なのは、一度「よそもの」の視点に立ってもう一度地域を見直すという姿勢である。Uターン組や転勤族、よそから嫁入りした主婦の方々（ヤングミセスだけでなく、オールドミセスも含めて）は、「よそもの」の視点を保有しているという意味で貴重な存在である。郷土史家や若者や地元で生業についている人なども、別の視点で地域を見ているという意味では「よそもの」的な視角を持っていることになる。

これまで、地域のまちづくりはその地域の

（これをここでは便宜的に「町並み観光」と呼ぶことにする）は、そしてこれが本特集の主要な関心事であろうが、他の観光地の場合とおかれている状況が大きく異なることに留意しなければならない。自然の景勝地はもちろん、神社仏閣にしろ、史跡名勝にしろ、通常変化しないものが観光対象となっている場合と違って、町並みには人が住んでおり、生活がある。むしろ、そこに人が住んでいることが来訪者の関心の中心だろう。したがって、これを凍結的に保存することは不可能である。仮にできたとしても、博物館のような生気のない町並みになってしまい、魅力の大半が失われてしまうことは想像に難くない。

歴史的な景観をとどめておいてほしいけれど、かと言って死んだ博物館のようになってほしくはない――町並み観光の問題は、こうした根本的な矛盾を内在させていることをまず確認しなければならない。この点に関する筆者の考え方は後に述べることにして、ここではまず、全体の枠組みを概観することにする。

町並みそれ自体が観光の主対象となっていない場合には、上述したようなせっぱつまった困難はないが、どのような町並みとして整備していったらいいのか、といった別の問題が浮上してくることになる。

城下町にふさわしい町並みや門前町らしい建物、高原リゾートの雰囲気をもり立てる風景など、その土地の特色をおもてに出した、いわゆる「らしさ」が求められるのである。しかし、「らしさ」に対する思いは各人によって異なり、その内実を確定させることは困難である。したがって、結果的にそれぞれ少しずつ異なったイメージのもとに建物が建てられることになり、地域の個性をあいまいなものにしているという例は少なくない。

問題は以下の2点にまとめられる。第一に、町並み観光と生活とをどのように両立させていくことができるかという点である。第二に、地域の個性をどのようなかたちで町並み整備につなげていけるかという点である。

歴史的町並みと生活環境

第一の問題点に関しては、以下のような考え方ができると思う。

まず、町並み観光の中身を掘り下げる必要がある。町並み観光が、単に伝統的な町並みを歩きながら鑑賞することであるとするならば、一地区30分もあれば十分ということになってしまう。いかに時間をかけて町並み整備のために地域住民の合意を形成し、努力してきたとしても、来訪客にとってみれば、芝居のセットと変わらないことになってしまう。

これでは努力が報われない。町並み観光は、書き割り的な街路景観を鑑賞するだけではなく、かつて広域の結節点として栄えてきたその都市の歴史をしのび、それが具体的に起伏のある地形を活かしてどのような形で町並みとして演出されているかを身をもって体験し、そこでどのような豊かな生活が実現されているかを知り、その豊かさを実感することへつながっていくべきものである。

究極的には、現時点で実現されているその地域の生活が地元の歴史や文化、さらには周辺の豊饒な自然環境をうまく活かした豊かなものであることが町並み観光の前提でなければならない。

来訪客はこうした豊かなライフスタイルをうらやましがってやって来ると考えるべきである。現状がそうでないとするならば、そうした来訪客が訪れるようにこちらから客を選ぶべきなのである。客を選ぶとは、なにも物

理的に選別するのではなく、地域の豊かなラ

ってそうした生活情報を発信するような形で

のプロモーション活動がなされるべきであるということである。

したがって、歴史的な町並みと生活との関連は、相反するものとしてとらえるのではなく、相補の関係にあるととらえるべきである。両者が補い合えるように現代生活のあり方をもう一度考え直すということである。

本特集で紹介されている飛騨古川の事例は、まさにこの確信を実証していると言える。飛騨古川が目指しているのは豊かな生活が実現されている都市であり、日々町並みが向上していくようなまちである。生活環境が向上していくことと町並みが向上していくことが同一平面で語れるまちがわが国に存在していることが、われわれに将来の希望を与えてくれる。

これまでの議論では、えてして現代人の欲求はすべて是として、これをいかに周辺状況とマッチさせるかという問題の立て方をしてきた。地球環境問題やエコロジー、環境保全が叫ばれる今日では、欲求そのものを町並み地区で提起されているようなライフスタイルのもとで見直してみること自体が意味を持つ

ここまで言うと、町並み観光とは、自ら生活環境を誇るまちづくり運動なのであって、その結果としてその町並みが多くの部外者を引きつけることになる、と考えた方が良さそうである。観光は町並みにとって目的なのではなく、結果なのである。重要なのは自分たちのライフスタイルを確立し、それに自信を持つことである。そこから産業が興ってくるのだ。

「らしさ」の確立

もうひとつの問題は、いかに地域の個性を確立していくかということである。

それぞれの地域にはそれぞれの地域なりの個性がすでに存在している。少なくとも私はこれまで国内各地で個性の感じられないまちというものにお目にかかったことがない。もちろん、地域の個性は多様であるので、それを実感するのにマニュアルがあるわけではない。しかし、明らかにそれぞれの地域には他にはない特色というものがある。

的なものであることに間違いない。しかし、特色と感じるかもまた、各人各様であるかもしれない。しかし、少なくとも外部からの客観的な眼には何らかの個性が感じられるものなのである。

問題は地元の人々がそれに気づいていないか、気づいていたとしても狭く近視眼的な理解にとどまっている場合が多いという点である。こうした限界を突き抜けた人も地域には存在しているだろうが、その着眼点は必ずしも地域の共通理解に至っているとは言い難いだろう。

つまりここで重要なのは、一度「よそもの」の視点に立ってもう一度地域を見直すという姿勢である。Uターン組や転勤族、よそから嫁入りした主婦の方々（ヤングミセスだけでなく、オールドミセスも含めて）は、「よそもの」の視点を保有しているという意味で貴重な存在である。郷土史家や若者や地元で生業についている人なども、別の視点で地域を見ているという意味では「よそもの」的な視角を持っていることになる。

これまで、地域のまちづくりはその地域の

ことを昔からよく知っているメンバーの専有物だったという例が少なくなかった。古くからの来歴をよく知っていることは確かに貴重なことではあるが、それだけで地域の個性が見分けられるわけではない。地域の個性を知るには他の地域との比較が必須である。そのためには「よそもの」の視点が必要なのである。

この時、観光は重要な役割を担うことができる。観光客はもっとも典型的な「よそもの」なのであるから、観光客の視点でものを考えるということは、そのまま自らの地域の個性を外からの眼で客観的に見直してみることにつながるのである。

いろいろな人と議論をしていくうちに、次第に地域の個性は見えてくる。「よそもの」的な視点は必ずしも「よそもの」でなくとも獲得できる。要は本人のものの見方の問題なのだ。

普段生活していると、あまりにも当たり前になってしまっていて、気にもとめないような風習や行事、食事や作法、風景や建物、色彩や香り、虫や花、組織や会合、方言や歌などをもう一度再発見することから、地域の個性は深まっていくと言える。「らしさ」の確立にはここまで踏み込む必要がある。町並みと直接関係ありそうな伝統工芸や大工仕事だけに対象を絞るのでは、真に重要な課題は表面化しない。

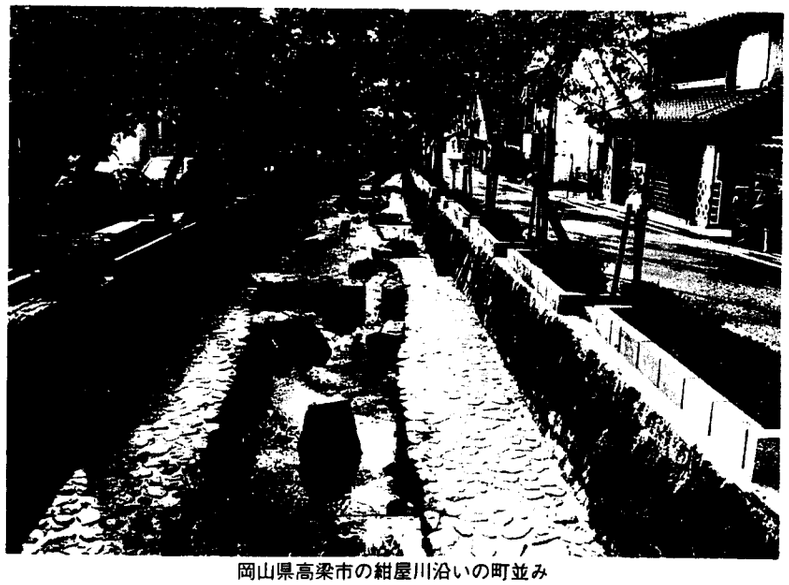
備中松山城の城下町、岡山県高梁市では商工会議所の独自事業として「高梁再発見事業」を1995年から始めている。これは借景庭園で有名な寺院でのガーデンコンサートや商人塾の開催など、必ずしも直接商店街振興には結びつかない活動を地道に実施していくことが高梁らしさの再構築につながるし、ひいては地域商業の発展につながるという確信から出発している。

本特集で紹介されている小樽の場合も、小樽運河の無惨な埋め立てに反対の声をあげた市民のねばり強い運動が展開されたことが、歴史を活かしたまちづくりへと都市づくりの目標を生み出していったのである。

重要なのは、こうした作業を草の根で行うことである。「らしさ」の確立は、誰かが正解を叫べばそれで済むというものではない。地域の個性に関する認識を地域の各人が共有しなければ、ことは進まないのである。問題はこうした認識の共有が実現するために、いかに時間をかけて地域の中で合意を形成していけるかにかかっている。そのためには民主的な手続きや、多様な意見を数多く引き出すためのワークショップの手法など、取り組まなければならないことが多い。これは、ある意味では、より良いまちづくりに向けた運動なのである。魅力的なリーダーと楽しい雰囲気の会合も欠かせない。その意味でこれは「ひとづくり」運動でもある。

こうした活動を通じて、地域の個性がその形を表してくるのである。ここまでの努力がないと、「らしさ」は本物にはなっていかない。町並み整備のためのルールづくりなども、こうした運動の一環としてあるべきなのであって、観光がまず最初に存在するというのでは大方の合意を取り付けることは困難だろう。そしてルールそのものはまちづくり運動の中でおのずと固まってくるものなのである。

観光の問題もまちづくりの大きな活動の一環としてとらえられなければならないと言える。



岡山県高梁市の紺屋川沿いの町並み

高梁市紺屋川沿いの伝統的な倉を守ろうと倉の中で開かれた「まちづくりコンサート」(1996.7)